

映画「Fukushima50」を見て考える

皆さんは、映画「Fukushima50」を見ましたか？

映画は、現場の責任者（佐藤浩一）と吉田晶郎所長（渡辺謙）を中心に展開します。全電源喪失という状況の中で、現場に留まって、死を覚悟してベントをしようとする戦士達が描かれています。映画はテンポが速くてリアルです。津波の襲来や原発事故の場面も良く描かれています。

映画を見た人と、話しをしました。

【評価できる点】

- ①政府の原発事故に対する認識が不十分で、対処が間違っていたことが描かれている。
- ②東電本社が、現場のことを理解できなかったことが描かれている。
- ③米国大使館が自国民を守ろうとしたことが描かれている。

【評価できない点】

- ①吉田所長自身も、最大13mの津波の予測について知っていた。しかし、安全よりも利益を優先する東電の経営陣に対して、そのことについて主張しなかった。
- ②東電社員や家族は、避難所では、被災者から励まされるのではなく、逆に非難された。東電社員は避難所では、東電の制服を着れなかった。その後、東電本社は、東電社員に対して、避難所からの退去を指示した。
- ③米軍のトモダチ作戦について、後日米国政府から日本政府に対して、かかった費用の請求があつては、日本政府は費用を支払った、決して、米国は日本にとって、無私のトモダチではなく、金銭的に割り切ったトモダチだった。

【映画の最後の場面—もしも私が監督だったら】

私は、映画の最後が、富岡町夜の森の桜並木で終わることに、違和感を持ちました。もしも私が監督だったら、最後は中間貯蔵施設（東京ドームの10倍）と福島第一原発の場面で終わらせます。そして、テロップ（字幕）では

「福島第一原発事故から9年、富岡町と浪江町では、帰ってきた住民は約1割、大熊町と双葉町では、アンケートで“町へは帰らない”と回答した住民は約6割。中間貯蔵施設（東京ドームの10倍）内の住民は、これから30年間町には帰れない。

今なお、46,678人の被災者が、避難生活を余儀なくされている。

原発事故によって、多くの住民が故郷と生活の場を失うことになった。」

映画「Fukushima50」

原作：門田隆将『死の淵を見た男 吉田晶郎と福島第一原発』（角川文庫刊）

監督：若松節朗 出演：吉岡秀隆・緒方直人・火野正平・富田靖子・安田茂美

原発内に残り戦い続けた現場の50人は“Fukushima 50”と呼ばれた。

自分たちが、最後の砦――

Fukushima 50

フクシマフィフティ

佐藤浩市 渡辺 謙

吉岡秀隆 緒形直人 火野正平 平田 満 萩原聖人
吉岡里帆 斎藤 工 富田靖子 佐野史郎 安田成美

監督：若松節朗

脚本：前川洋一 音楽：岩代太郎

原作：門田隆特「死の淵を見た男 吉田昌郎と福島第一原発」(角川文庫刊)

fukushima50.jp

2020年3月

2011年3月11日、東日本大震災発生。福島第一原発は史上最大の危機に襲われた。

【桜を見る会 のお知らせ】

◆4月11日（土）、12日（日）、18日（土）、19日（日） こちら福島において、上田主催の【桜を見る会】を開催します。興味のある方は、連絡してください。